

## 学級内の不登校生徒に対する認知

——教師からの情報提供の効果——

森本 育代\*・有馬比呂志\*\*

Cognition of Non-Attending Classmates

Ikuyo MORIMOTO and Hiroshi ARIMA

The purposes of the present research were to examine the relation between the report of non-attending students by their teachers and the students' cognition for school non-attendance in their classroom, and to investigate the classroom climate. The questionnaires were administered to 99 junior high school students in Hiroshima. The results of analysis indicated that the information about students of school non-attendance by their teachers was the important factor of the class management.

**Key words:** school non-attendance, junior high school students, classroom climate

### 問 題

本研究は、不登校生徒を取り巻く学級内の生徒に焦点を当て、担任教師による不登校生徒についての情報提供が及ぼす効果を検討し、彼らが再登校してきたときの受け入れ態勢について考察するものである。

毎夏、文部科学省発表の学校基本調査速報による小・中学校の「不登校」児童・生徒数が、マスコミ各社によって取り上げられており、近年特に不登校児童・生徒数の増加が紙面を賑わしている。2001年度の「不登校」を理由とする長期欠席者数（年間30日以上）はおおよそ13万9000人で過去最高となった。このうち、中学校ではおおよそ11万2200人で、全生徒数に占める割合は2.81%となっている。この計算では、中学校では36人に1人の割合で長期欠席者がいることになるのである。

\* 初等教育学科19期生

\*\* 本学助教授

明治5（1872）年、学校教育制度を開始した我が国では、20世紀初頭には就学率が90%以上に達していた。周知のとおり、学校制度とは、統一的な近代国家と豊かで文明的な産業社会を築き上げる目的で西欧から移入してきた制度である。西欧へ追いつくべく、近代化への切迫した要請と生活向上への切実な夢を担い、学校はかけがえのない、絶対的で聖なる学びの場として社会に浸透し、民衆に支えられてきた。こうして、「学校へ行って当たり前」という考えが人々に定着した我が国において、不登校の児童・生徒はどのように出現したのだろうか。

長期欠席率が減少してきた昭和30（1955）年代の初めから、疾病、生活困窮、親が教育へ無理解・無関心、本人の勉強意欲の乏しさ、などのように、子どもたちの登校を妨げるものとして従来考えられてきた諸要因がないにもかかわらず、登校できない子どもたちが都市部を中心に現れてきたのである。これが、「不登校」の我が国最初の出現である（滝川、1998）と言われ

ている。

このように、病気などの正当な理由なくして学校を長期間欠席する子どもは、学校側から「問題行動」とみなされてきた。この新しいタイプの長期欠席現象は、まず怠学としてみられ、研究対象となっていたのである。

ここで、「不登校」用語について少しふれておく。「不登校」という言葉は、1990年以降「登校拒否」と並び、さまざまに使われ、その定義・概念が混乱しているが、1989年に発足した文部省の「学校不適応対策調査研究協力者会議」が「登校拒否はどの子にも起こりうるものである」という考えを打ち出し、現在は「不登校」という用語が定着しているといえよう。

文部省調査では、それまで年間50日以上欠席で行われていたが、1991年度から年間30日以上にまで対象を広げた。この変更の背景にはさまざまな理由があるとされるが、直接のきっかけとしては、文部省の「学校不適応対策調査研究協力者会議」の報告書（「中間まとめ」、1990）において「50日まではいかないうちでも学校を欠席しがちな子ども」の存在が指摘されたことがあげられよう（保坂、2000）。

この学校不適応対策調査研究協力者会議では、不登校の定義を「登校拒否（不登校）とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的理由によるものを除く）」としている。

不登校児童・生徒の数は、年々増加の一途を辿っており、この現状は学校教師が今後も彼らと関わる機会の増加を意味するものだと言えよう。

これまでの研究をみると、明確な理由なしに学校を欠席することは、主にその子どもや家庭

に何らかの問題があるとみなされる傾向があり、研究対象は不登校生徒に向けられることが多く、彼らの類型化・治療・予後や家族の分析を中心に研究が行われてきた（松本、1986；小林・鈴木、1990；小野、1993；本間・中川、1997）。このように対象とされるのは、一部の児童・生徒であり、クラス全体を対象として見られることはほとんどなかったのである。

しかし、河合（1992）や佐藤ら（1994）が述べているように、不登校問題は個人の問題ではなく、学級の子どもたちも含めた、クラス全体の問題としてとらえていく必要があるように思われる。クラス全体の取り組みとして、学級作りをしているという実践報告は見られるが、これは予防的な取り組みである。文部科学省の学校基本調査にも表われているように、中学校でクラスに1人は長期欠席者がいる現在、不登校問題は多くの子どもたちを覆う問題なのであり、一部の特定の子どもたちに対処する方策を考えるだけで事足りる段階ではもはやなかろう。

教師が不登校の児童・生徒に対してとる態度、働きかけを重要視するのは当然のことであろうが、彼らが再び教室に入ろうとしたときのこととも考慮するとき、学級内の児童・生徒への働きかけも重要となってくるように思われる。

しかしながら、こうしたクラス単位での不登校生徒に対する働きかけを検討した研究はほとんど見られない。

中学生は児童期から思春期への移行期にあたり、心理発達上の最も難しい時期である。また、不登校が小学校より中学校にはるかに多く出現することを考慮し、本研究では中学生を対象に、不登校生徒を取り巻く学級内の生徒に焦点を当てる。不登校生徒を個人の問題としてではなく、学級全体の問題として捉えた場合、彼らの再登校時における受け入れ体制との関係から学級風

土の検討も重要な要因になることが考えられる。

## 目 的

担任教師からの情報提供により、長期欠席者への評価が異なってくるのか、またそれらの情報提供と当該の学級風土との関連について検討する。

さらに、長期欠席者が再登校してきたときに、学級内の生徒が行う支援として、どのような情報であれば効果があるのかも検討することを目的とする。

## 方 法

**調査協力者** 公立中学校の、ランダムに選出された3学級の生徒（男子55名、女子44名）。

**調査時期** 2002年11月中旬。

**調査方法** 無記名の質問紙法による学級単位の一斉調査を行った。実施は学級担任に依頼した。

**調査内容** フェイスシートに、学級に長期欠席者が「いる」と回答した人は設問Aへ、「いない」と回答した人は設問Bへ進むよう付記し、設問Cでは全員に解答を求めるよう構成された。

### 設問A・設問B

担任教師からの長期欠席者に関する情報提供の有無により、学級の生徒の不登校生徒へ対する評価の違いを見る。

不登校生徒への評価意識を見るため、本間（2000）が作成した14項目から成る、「不登校生徒に対して抱いている評価意識」を用いた。

回答は、「強く思う」から「ぜんぜん思わない」の4件法で求めた。項目得点は、尺度の意図する内容方向の反応からそうでない方向に向けて、4点～1点とした。

学級内の生徒が不登校生徒へ抱いている思いについて、担任教師からの情報提供による違いを見ていくため(1)担任教師从不登校生徒の話があった場合、生徒はその話をどの程度認知しているか(2)担任教師从不登校生徒の話がなかった場合、生徒の彼らへの関心について(3)長期欠席者に対する生徒のサポート意識、を見る項目を予備調査の結果から設けた。

**設 問 C** 学級の全体的な雰囲気を把握するために、伊藤ら（2001）によって作成された8尺度57項目から成る学級風土質問紙を用いた。

各項目に対し、回答者の所属する学級を「そう思う」から「そう思わない」の5段階で回答するよう示した。項目得点として、尺度の意図する内容方向の反応からそうでない反応に向けて、5点～1点とした。

## 結 果

### 不登校生徒への評価意識について

不登校生徒への評価意識の14項目について因子分析（主因子法）を行った結果、4つの因子が抽出された。抽出された因子のうち、因子負荷量が3.50に満たなかった「腹が立つ」の1項目を除く、3因子13項目を採用することとした（TABLE 1）。

TABLE 1 不登校生徒への意識評価に関する因子分析（バリマックス回転後）

	配慮・関心	羨望	疑問・批判	h <sup>2</sup>
12. 心配	0.79	-0.08	0.10	0.64
10. 早く来てほしい	0.73	-0.21	0.01	0.58
6. 助けてあげたい	0.72	-0.24	0.16	0.61
11. 好きにさせればよい	-0.67	0.15	0.05	0.48
3. 関係ない	-0.57	0.12	0.08	0.35
4. かわいそう	0.53	-0.05	0.33	0.40
7. 本人の自由	-0.44	-0.02	0.02	0.20
9. 自分も休みたい	-0.15	0.96	-0.05	0.94
2. うらやましい	-0.22	0.66	0.06	0.49
8. なぜ学校に来れないのか不思議	-0.08	-0.11	0.66	0.46
13. 休んでいる理由を知りたい	0.20	0.15	0.66	0.50
14. 早く学校に来るべき	0.22	-0.03	0.49	0.29
1. よくない	-0.15	0.03	0.36	0.15
寄与率 (%)	24.08	11.86	10.81	
累積寄与率 (%)	24.08	35.94	46.75	

TABLE 2 因子別の平均得点と標準偏差及び分散分析結果

因子／学級	n	M	SD	F 値
配慮関心				
class A	34	2.46	0.39	0.58
class B	34	2.44	0.34	
class C	14	2.33	0.41	
羨望				
class A	34	1.43	0.65	0.99
class B	34	1.37	0.69	
class C	14	1.57	0.81	
疑問・批判				
class A	34	2.62	0.81	0.92
class B	34	2.55	0.56	
class C	14	2.46	0.55	

第1因子は“心配”“早く来てほしい”などから構成されており、この結果は本間（2000）と同様であり、援助的な姿勢と、“好きにさせればよい”“関係ない”という、不登校生徒への関心を示す積極的な姿勢を意味するものである。よって、この因子を「配慮・関心」と命名した。第2因子も、先行研究と同様に“自分も休みたい”の負荷量が大きく、“うらやましい”から成るもので、そのまま「羨望」とする。第3因子は、“なぜ学校に来れないのか不思議”“休んでいる理由を知りたい”などからなり、「疑問・批

判」と命名した。第1因子と第3因子は、配慮－批判のように、評価の方向としては反対であるが、不登校生徒への積極的な姿勢を示しているともみなすことができる。第2因子は第1、第3因子とは反対に、消極的な姿勢を示していると言えよう。

### 不登校生徒への評価意識の比較

不登校生徒への評価意識で抽出された3因子で、学級を要因とした1要因分散分析を実施した。結果は、3因子とも有意な結果は認められ

TABLE 3 因子別の平均得点と標準偏差及びt検定結果

	配慮・関心	羨望	疑問・批判
男子 (n=41)	16.56 ( 7.20)	2.61 (0.89)	10.05 ( 7.80)
女子 (n=41)	17.51 ( 5.91)	3.10 (2.84)	10.00 ( 6.60)

注) 上段の数値は平均値、( ) 内は標準偏差を示す。

なかった(「配慮・関心」 $F(2, 79) = .59$ , ns.、  
「羨望」 $F(2, 79) = .99$ , ns.、「疑問・批判」 $F(2, 79) = .92$ , ns.) (TABLE 2)。

次に男女差を見るため、算出された得点を対象にt検定を実施した。その結果、「配慮・関心」において傾向差が認められた( $t = 1.68$ ,  $df = 80$ ,  $p < .01$ )。残りの2因子には有意差が認められなかった(「羨望」 $t = .87$ ,  $df = 80$ , ns., 「疑問・批判」 $t = 1.62$ ,  $df = 80$ , ns.) (TABLE 3)。

#### 不登校生徒への認知

学級内の生徒が不登校生徒へ抱いている思いについて、担任教師からの情報提供の有無による違いを見ていく。

##### 〈学級Aと学級Bについて〉

学級Aと学級Bのそれぞれ36名を対象に、長期欠席者がいるかどうかを尋ねたところ、両学級とも長期欠席者が「いる」と回答した人が36名ずついた。このうち、学級Aでは、教師から長期欠席者についての話を「聞いた」と回答した人が32名おり、「聞いていない」と回答した人4名、「無回答」1名であった。学級Bでは「聞いた」人3名、「聞いていない」人33名であった。

担任教師からの情報提供の有無による相違を見ていくために、提供の有無という対照的な特徴を示す2学級を以下の順で比較しながら見ていく。

##### (1)情報提供の認知について

学級Aで話を「聞いた」と回答した人31名に、その話の認知の程度を尋ねた。担任教師からの話を「よく聞いた」と思う人はいなかった。「少し聞いた」と思う人は22名、「あまり聞いていない」人5名、「ほとんど聞いていない」人4名、「無回答」は1名であった。

学級Bで話を「聞いた」と回答した3名に、その話の認知の程度を尋ねたところ、「よく聞いた」、「少し聞いた」と回答した人が1名ずつ、残る1名は「無回答」であった。

##### (2)生徒の長期欠席者への関心について

学級Aで、担任教師からの話を「聞いていない」と答えた4名を対象に、休んでいる理由を知っているかを尋ねた。「よく知っている」、「少し知っている」人はいなかった。「あまり知らない」、「まったく知らない」と回答した人は2名ずつであった。

学級Bで、話を「聞いていない」と回答した33名を対象に、同様の質問をしたところ、「よく知っている」と答えた人はおらず、「少し知っている」人4名、「あまり知らない」8名、「まったく知らない」21名であった。

担任教師から、長期欠席者についての話を聞きたいと思ったかを問う質問に対して、学級Aでは「聞きたい」、「どちらかといえば聞きたい」、「あまり聞きたくない」と回答した人はおらず、「聞きたくない」と答えた人が3名であった。

その理由として、自分とは関係ない、個人的な理由だからという回答であった。

学級Bでは話を「聞きたい」人3名、「どちらかといえば聞きたい」8名である。その理由は、力になれるかもしれないという援助の姿勢を見せる人3名、クラスの問題意識をもっている人5名、その他1名、無回答1名であった。また、話を「あまり聞きたくない」人16名、「聞きたくない」人3名であり、その理由として、自分とは関係ない・力になれるだろうのように無関心と思われる人6名、個人的なこと・言っていて欲しくないだろうという配慮とも見られる姿勢の人3名であった。

### (3)長期欠席者に対する援助について

長期欠席者が「いる」と答えた学級Aと学級Bの各36名を対象に、長期欠席者の力になりたいか、という質問をした。学級Aで「そう思う」と回答した人は5名、「少し思う」人16名、「あまり思わない」7名、「まったく思わない」4名、「無回答」4名であった。学級Bでは、「そう思う」5名、「少し思う」12名、「あまり思わない」14名、「まったく思わない」1名、「無回答」4名であった。

また、自分にどんなことができるか分かるか、という質問について、学級Aで「よく分かる」と回答した人3名、「少し分かる」9名、「あまり分からない」10名、「まったく分からない」10名、「無回答」4名であった。学級Bでは、「よく分かる」1名、「少し分かる」3名「あまり分からない」13名、「まったく分からない」15名、「無回答」4名という回答が得られた。

### 学級風土について

主因子法・バリマックス回転により、先行研究に従い8因子となるよう因子数を設定し、因子構造を検討したが、筆者が設定した基準を満

たす結果が得られなかった。伊藤ら(2001)の場合にも尺度間相関が高く、相互に単純構造でないとしており、尺度相互の関係ではなく1つ1つの尺度の積み重ねから学級の全体像を描くべきであるとしている。学級を把握しようとするとき、ある一面を見て把握しようすると偏りが生じてしまう。学級の雰囲気は、教師や子どもたち相互により作り出されており、それらを単に切り離してみていくことはできないと考える。伊藤らは尺度・項目の結果から学級風土を記述し、学校臨床実践への寄与を目的としている。この質問紙を用いることによって、学級の全体像を把握することが可能であるだけでなく、生徒が日ごろ感じている学級の様子をも把握できよう。したがって、本研究でも「学級活動への関与」、「生徒間の親しさ」、「学級内の公平さ」、「学級への満足感」、「自然な自己開示」、「学習への志向性」、「規律正しさ」、「学級内の公平さ」からなる、8因子57項目を用いた。

### 学級風土の比較

伊藤らが抽出した8因子を用いて、1要因分散分析を実施し、学級差を検討した。結果は以下に示すとおりである。「学級活動への関与」、「生徒間の親しさ」、「学級への満足感」、「学習への志向性」、「規律正しさ」で有意差が認められ、「自然な自己開示」、「学級内の公平さ」では有意な傾向差がみられた。なお、「学級内の不和」においては有意差は認められなかった(TABLE 4)。

## 考 察

### 不登校生徒への評価意識について

不登校生徒への評価意識を見るため、本研究でも本問(2000)の用いた評価意識14項目を用いた。その結果、3因子を採用することとなった。

第1因子では“心配”“早く来てほしい”“助

TABLE 4 学級風土の学級差及び分散分析結果

領域／学級	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> 値	多重比較
学級活動への関与					
classA	30	3.03	.68	20.59***	A < B***
classB	34	3.84	.64		
classC	21	2.87	.46		C < B***
生徒間の親しさ					
classA	30	3.42	.77	6.09***	C < B***
classB	34	3.69	.83		
classC	21	2.98	.47		C < A †
学級内の不和					
classA	30	3.08	.48	1.52	
classB	34	3.15	.33		
classC	21	2.95	.47		
学級への満足感					
classA	30	3.83	.88	10.47***	C < B***
classB	34	4.35	.83		A < B*
classC	21	3.30	.81		C < A †
自然な自己開示					
classA	30	3.35	.55	5.42**	
classB	34	3.58	.76		
classC	21	2.97	.67		C < B***
学習への志向性					
classA	30	2.49	.54	9.56***	A < B***
classB	34	3.01	.62		
classC	21	2.45	.44		C < B***
規律正しさ					
classA	30	2.61	.64	12.62***	A < B***
classB	34	3.26	.61		
classC	21	2.57	.55		C < A***
学級内の公平さ					
classA	30	3.05	.78	2.87†	B < C †
classB	34	3.35	.64		
classC	21	3.50	.62		

†  $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

けてあげたい”“かわいそう”の4項目が共通していた。先の研究では、この4項目について、不登校生徒への肯定的評価としてみている。本研究では、これらに“好きにさせてはいけない”“関係ある”“本人の自由ではない”の3項目が加わり、7項目からなっている。後の3項目に

ついて、先行研究では、不登校生徒への否定的評価としてみている。

本研究で得られた第1因子は“心配”と“好きにさせてはいけない”というように、不登校生徒への肯定的－否定的とみると、評価の方向としては対称的とも思われるが、不登校生徒へ

の積極的な姿勢を示しているとみなすことができる。

第2因子は、“自分も休みたい”“うらやましい”から成っており、第1因子のように不登校生徒に対する積極的な関心は見られず、どちらかといえば受身的、消極的な姿勢を示しているといえよう。

4項目から成る第3因子は、“なぜ学校に来れないのか不思議”“休んでいる理由を知りたい”のように配慮の姿勢と、“早く学校に来るべき”“よくない”のように批判の姿勢が見受けられる。この2つは評価の方向としては反対であるが、第1因子と同様、不登校生徒への積極的な姿勢を示しているとみなすことができよう。

## 不登校生徒への評価意識の比較

### 学級を要因とした分散分析

学級を要因として、抽出された3因子で分散分析を行ったが、有意な差は見られなかった。学級Aと学級Bは長期欠席者がいる学級である。

本間（2000）は、中学生の登校を巡る意識について、92年度と98年度を比較した研究の中で、不登校生徒に対して批判的態度を示す生徒が98年度ではやや減少したものの、無関心な生徒はかなりの増加を示したことを明らかにしている。得られた第2因子を消極的な姿勢と見るとき、どの学級も得点は高いとは言えない。しかし、第1因子・第3因子についてみても、各学級の得点は決して高くない。

不登校が増加している現在、「学校を休んでいる人がいるのが当たり前」という状況になっていることが、この原因のひとつとして挙げられる。先にも述べたように、学級内での不登校の日常化が言えよう。

しかし、この不登校の日常化は、学級内の生徒が不登校を個人の問題として考えてしまう恐

れがあるのではなかろうか。このような生徒が多い学級においては不登校生徒が再登校でき、教室に入ろうとしたときに学級の雰囲気が大きな脅威となりうることも十分考えられるのである。特に中学2～3年生になると、自分の進路や進学などのことで人のことを考える余裕がなくなる生徒も少なくないはずである。彼らが徐々に元気を取り戻しつつ登校できるようになるためには、級友たちの暖かい支援が必要となってくるであろう。こういった級友の姿勢は、日常の学級経営によるところも大きいのではなかろうか。

### 男女差について

性差に関して $t$ 検定を行ったところ、有意差が認められたのは第1因子の「配慮・関心」のみであった。

思春期前半にあたる中学生の仲間関係の発達特徴として、仲良しグループ（チャム・グループ）がある。この語源となっているサリバン（Sullivan, 1953）のいうチャム（chum；親友）とは、仲良しグループから生まれた、特に親密な友人を指していると考えられており、このグループの特徴は同一言語であるとされている。つまり、互いの共通点・類似性の内容よりもその言葉の確認をすることに意味がある。そして、この特徴はどちらかといえば女子に見られるのである。男子よりも女子の方が得点が高いのは、女子の方が対人関係に強い関心をもっているからではなかろうか。この女子中学生の傾向は、先の本間の研究においても共通している点である。

### 長期欠席者への認知

担任教師から情報提供があったと回答した学級Aの32名では、話を「少し聞いた」22名、「あ



まり聞いていない」5名、「ほとんど聞いていない」4名で、「よく聞いた」人はいなかった。

情報提供がなかったと回答した学級Bで、話を「聞いた」人3名にその認知の程度を尋ねると、「よく聞いた」、「少し聞いた」人は1名ずつであった。この「よく聞いた」と回答した人は、長期欠席者と調査前までよく遊んでいたとの記述から、非常に親密な関係であったことが伺える。したがって、教師よりも事情をよく知っており、そのために教師から個人的に聞かれたとの回答が得られた。

また、「少し聞いた」人もやはり長期欠席者と小学校や以前の学年でよく話したと記述しているように、親しい間柄であったことが推測される。この人の場合は、教師に個人的に聞きに行ったとの回答であった。

学級Aのように、話を「少し聞いた」と感じている人が多いことを考えると、生徒が聞きたいと思っていた内容と実際に教師が話した内容、またはその時間・回数のがずれが生徒の中で生じていることが推測される。

#### 長期欠席者への関心について

学級Bの33名では、休んでいる理由を「少し知っている」人4名で、「休んでいる人を見たり、人に聞いたりしたから」、「友達から」、「うわさ」という記述が得られた。

ここから、周りからのうわさで長期欠席者について知っている生徒がいることが分かる。うわさは情報としては不確かであり、それによって引き起こされる誤解もあろう。うわさによって生じる誤解で、長期欠席者に対しての援助が困難になることが予想される。

先生から話を「聞きたかった」と回答した人にその理由を尋ねたところ、「休んでいる人の力になってあげられるかもしれない」、「クラスみ

んなの問題」、「興味があった」という回答が得られた。これらから、援助姿勢、クラスの問題意識、興味といった、長期欠席者に対する積極的な関心がうかがえる。

逆に話を「聞きたくなかった」と回答した人は、「自分とは関係ない問題」、「聞いてもその人の力になってあげることはいできない」、「個人的な理由」といった回答であった。ここから、長期欠席者については、個人の問題であるという意識をもっていることが分かる。

#### 長期欠席者に対する援助について

長期欠席者の力になりたいか、という質問に対して学級Aでは「そう思う」、「少し思う」人が36名中21名、学級Bでは36名中17名であった。わずかな差ではあるが情報提供の有無により、生徒の意識の違いが現れているのかもしれない。しかし、自分にどんなことができるのか分かるか、という質問に対しては、「あまり分からない」、「まったく分からない」と答えている人の方がどの学級でも多く、実際に行動に移そうと考えたとき、どのようなことをすればよいのかが分からない生徒が多いことが分かる。

#### 学級風土について

伊藤ら（2001）の学級風土質問紙は、生徒の評定値から学級像の把握を目指している。この中で「学級内の不和」は、グループ化や学級の雰囲気悪化によって学級全体が分断していくような組織レベルでの動きに焦点を当てている。この「学級内の不和」と逆転とも思える「生徒間の親しさ」は、個々の生徒間に感じられる愛着心の集積をみていくものである。この2つに注目して、学級Aと学級Bをみると、どちらも「生徒間の親しさ」の得点が高い。また、個人レベルで学級に所属する楽しさの浸透を問う

「学級への満足感」では、学級Aよりも学級Bで有意に得点が高く、学級Bの方が、生徒たちの親密度が高く、もめごとなども少ない、穏やかな学級であることが推察された。

## 全体的考察

本研究の結果より、担任教師からの情報提供が必ずしも必要がない場合のあることが考えられた。たとえば、学校生活場面において問題が起こったとき、友達や教師から援助されながらそれを乗り越え、あるときは相手を援助する。こうした関係ができている学級においては、情報を開示するまでもなく、援助態勢が整っていると考えられるのである。互いに助け合い、支え合おうとする関係の見られる学級では、あるがままの自分を受容し、また他者をも受け入れることが可能なのではなかろうか。つまり、ある程度、学級風土、特に「支持的」風土がある学級においては、教師の情報開示を必要としない場合のあることが示唆される。

青野（1996）は、不登校やいじめの改善の手がかりや予防に効果的なこととして、友人関係などの人間関係を豊かにすることを挙げている。不登校の対応という個人の問題としてではなく、学級風土をつくりあげていくという意味からも、学級の問題として全員が考えていくことには意味があろう。情報を生徒に提供することは、風土づくり、さらには学級経営を円滑に進めていく上で重要な役割を果たすのではなかろうか。

担任教師からの情報提供による学級風土との関連をみたときに、情報提供のなかった学級Bの方が、情報提供のあった学級Aよりも学級風土得点が高かったという結果であった。これより、本研究の学級Aでみられたように、不登校生徒に対して否定的な見方をする生徒の多い学級においては、教師が長期欠席者の情報を開示

することによって支持的風土が高まっていくことが期待される。一方すでに支持的風土の高いと思われる学級Bにおいては、情報提供をしなくても、すでに長期欠席者に対する援助体制は十分に機能できる状態にあったことが推察される。以上から Fig. 1 のようなモデルが考えられる。もちろん教師からの情報と元々の学級風土がいつも加算的關係に集約できるとはかぎらないであろうが、理解を容易にするために単純化したモデルとして図示したものである。

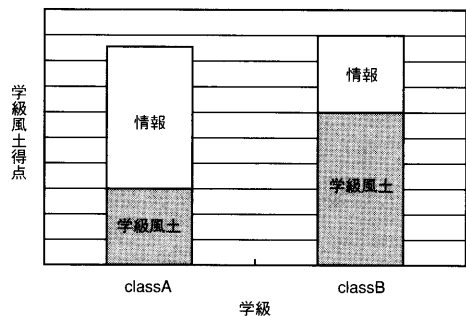


Fig.1 学級風土得点を形成する元の学級風土と教師からの情報の役割

さらに注目すべきは、長期欠席者が再登校してきたとき、援助の気持ちはあるがどうしてもいのか分からない生徒がいるということである。長期欠席者への援助について、相手との関係が親密であれば、どのようなことができるのか分かるだろうし、具体的に行動に移すこともできるかもしれない。しかし、継続して欠席している生徒の場合、たとえば、小学生のころからずっと来ていないなどの生徒の場合には、学級に会ったことも見かけたこともないという生徒がいても当然であり、そのような生徒に援助を求めても生徒が戸惑うのは当然のことであろう。生徒同士の認知と援助との関連が大きいことが考えられる。

担任教師が情報を開示する場合、できる限り具体的に援助の方法を伝えておく必要があるこ

とも、このことから示唆された。

今回は、情報提供の有無により、生徒の長期欠席者に対する見方、かかわり方が異なるかどうかを中心に見ており、学級単位で検討している。ここでの問題点として、学級単位で見えるには情報提供のあった学級となかった学級が1学級ずつであり、学級数が少ないことが挙げられる。そして、生徒の認知のみではなく、教師の意識についても並行して調査、検討する必要がある。これらが今後の課題として残された。

## 引用・参考文献

- 青野 勇 1996 いじめ・不登校への実践 片野智治（編）エンカウンターで学級が変わる中学校編 グループ体験を生かしたふれあいの学級づくり 図書文化社 54-55.
- 朝倉景樹 1995 登校拒否のエスノグラフィー 彩流社
- 伊藤亜矢子・松井仁 2001 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究 49, 449-457.
- 小野 修 1993 不登校の親の変化過程仮説—パースンセンタード・アプローチ— 心理臨床学研究 3, 17-27.
- 片岡徳雄 1991 先生シリーズ⑫個を生かす学級を育てる先生 図書文化社
- 学校不適応対策調査研究協力者会議 1990 登校拒否問題について（中間まとめ）
- 河合隼雄 1992 子どもと学校 岩波新書
- 河合隼雄 1995 子どもと教育 臨床教育学 岩波書店
- 河合 洋 1986 学校に背を向ける子ども 何が登校拒否を生み出すのか NHK ブックス
- 小林一也・永岡順 1994 新学校教育全集12 学級活動 ぎょうせい
- 小林一也・水越敏行 1994 新学校教育全集15 生徒指導 ぎょうせい
- 小林正幸・鈴木聡志 1990 半記述的チェックリスト法および多変量解析法による思春期登校拒否事例に関する研究(1)—改善の程度に影響を及ぼす要因の検討— カウンセリング研究 23, 119-132.
- 佐藤修策・黒田健次（著）1994 あらためて登校拒否への教育的支援を考える 北大路書房
- 塩見邦雄・吉野要（編）1990 中学・高校の心理と指導 ナカニシヤ出版
- 滝川一廣 1998 不登校はどう理解されてきたか 大塚信一 いじめと不登校 岩波書店 163-186.
- 保坂 亨 2000 学校を欠席する子どもたち-長期欠席・不登校から学校教育を考える 東京大学出版会
- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究 48, 32-41.
- 本間友巳・竹内伸宜 1993 中学生の登校を巡る諸問題(1)(2) 日教文第35回総会論文集 468-469.
- 本間友巳・中川美保子 1997 不登校児童生徒の予後とその規定要因—適応指導教室者のフォローアップ— カウンセリング研究 30, 142-150.
- 増井武士 2001 不登校から見た世界 有斐閣
- 渡辺弘・森田希一 2001 「援助」する学校へ学びの援助活動としての教育実践 川島書店